

清らかな魂を豊かな色彩によって
呼び覚ます人

宮崎睦子詩集『美しい人生』に寄せて

鈴木比佐雄

1

宮崎睦子さんは、独特なクラージュの技法を駆使した画家であり、社交ダンスの先生であり、また恋情を詠いあげる歌人でもある。そんな多彩な表現者である宮崎さんは、四年前に不治の病に侵された夫を亡くしてしまう。その病魔と戦う夫の壮絶な姿を見て、誰にも告げられない思いをいつしか詩として書き始めていた。宮崎さんは、詩を通して自分の経験知である魂の記録を確認したかったのだろう。そして書き残した詩篇を個人誌「心の雫」に発表してきた。その四号分に収録し

た百数十篇の中から五十篇ほどを選び出し編集された詩篇が今回の第一詩集となった。最近になって宮崎さんは福岡県詩人会に入会したそうだが、それまで詩人団体には何処にも所属せずに独力で詩作を続けてきた詩人だ。

宮崎さんの詩の特長は、夫婦愛の詩でありながらも、自分の故郷である種子島や現在も暮らしている福岡での出来事を見詰め、家族や友人との思い出を記した家族愛や友愛に満ちた詩篇である。宮崎さんが確認したかったものは、自分が関わってきた家族や友人たちや故郷が存在していたから自分もまた生きてこられたという事実の重さだったろう。またそれらの愛する人たちが亡くなっていった後にも、生きねばならない残された人間の苦悩を赤裸々に表現している。それでもなぜ人間は命のある限り生きねばならないか、というシンブルな問いが詩を促している。その問いかけに、

たとえ愛する人が亡くなったとしても、自分を生かすような希望の言葉が届けられた思い出や、その際の豊かな色彩の情景を心に反復することができれば、それらが心の財産となって死者との無言の対話を継続し、豊かに残された時間を切り拓いていけると希望のように語っている。

2

第一章「赤いランドセル」十六篇には、夫の死を予感しながら、故郷での詩篇が中心にまとまっている。冒頭の詩「冬の花火」は、「どうして泣くのかな」と自問することから始まる。そして「悲しいから？／いいえ／あなたがとつても／美しいからです／眩しいからです」と自ら回答し、病に侵された夫の存在が「冬の花火のようで／涙がこぼれるのです」とその思いを語っている。夫の肉体が衰えて死んでいくにも関わらずその存

在が「冬の花火のよう」に壮絶な美しさを発していることに驚かされている。あたかも死ぬべき淋しい存在であるからこそ、逆に美しい最後の命のほとばしりのような光を発する存在であるのだという逆説を物語っている。その意味で淋しい「冬の花火」の中に壮絶な「美しい人生」を重ね合わせていく感受性が宮崎さんの詩を成立させているのだろう。次の詩「赤いランドセル」には、宮崎さんの友人との関わりの原点が記されている。

赤いランドセル

わたしは

小学校一年生

種子島の

小さな漁村で

育った

ある日

海岸の方で

人だかりがした

友達のお父さんが

ながらめ取りに行き

夕方になっても

海からあがつてこない

村中総出で

おぼれていた

お父さんを

浜へあげた

しばらくして…

ランドセルを買えずにいた友達は

大阪へ引越すことになった

わたしは

買ってもらった

真新しいランドセルを

友達にあげた

さようなら

と言つてあげた

父母から

ずいぶんしかられた

思い出の

赤いランドセル

故郷の海で「ながらめ取り」に行った友の父が死んでしまった。友はランドセルを買ってもらえないまま大阪へ引越していく。その時に小学校

一年生の宮崎さんは、自分の「真新しいランドセル」を友にプレゼントしてしまう。この詩の意味するところは、私たちに友が最も悲しんでいる時に慰めにはならないかもしれないが、自分のできる最良の方法で友を慰めるべきだという人間としての誇りを語ってくれていることだ。小学校一年

生と言えば六、七歳の幼子だが、すでに他者の悲しみを知り、その悲しみを癒そうとして、自分の最も大切な父母から買ってもらった「赤いランドセル」をプレゼントしてしまうのだ。宮崎さんの精神は、いつもこの時の純粋な少女の心を想起し続けてきたのだろう。この清々しい行為をてらいなく記すことが宮崎さんにとって詩そのものであるのだろう。「赤いランドセル」のほろ苦い思い出は、この世で最も大切な他者への同情心やそれ

を行為に移していく、何かやむにやまれぬ他者愛のような精神を一篇の詩の中に定着させている。

序詩「あなたへ」に示しているように人間に本来的に具わっている「清らかな魂」をこの詩「赤いランドセル」は、伝えてくれている。花火の火花の中の赤と同様に、「赤い」色彩は、宮崎さんの魂の色なのかも知れない。

また詩「十三の夜」に記されている家族の不和で居場所がなく緊急避難していく友の家の存在や、詩「星」のさとうきびの美味しいところを見分ける方法など、村全体が家族のような在りかたが宮崎さんを育て、今もそのことを大切に想起していることが分かる。また父や母との思い出も、二人の不和を暗示しながら一人の人間としての淋しさを感じている。そこには飾らずにありのままを見聞きし記そうとする表現者として真実を見ようとする姿勢が貫かれている。

一章の中でその他に興味深い詩「色」がある。

色

色って

そんなに単純じゃあなかったんですね

色の中に色があって

そのまた中に色があって

そのまた中のそのまた中に色があって

ずうつとずうつと

色って

とても神経質だったんですね

微かに微かに

違うんですね

軋むように

戦っているんですね

踊るように唄うように
弾んでいるんですね

色って

こんなにわたしの中に棲んでいたんですね

少女の頃の

わたしの色

さよならした人の

悲しい色

あなたと出会った

思い出の色

色って

ものがたりだったんですね

宮崎さんの詩の特筆すべき点は、思い出の中に

豊かな「色」を発見していくことだろう。思い出はセピア調かモノクロのようなイメージがあるが、その時の無数の色を想起して、その世界に奥行きを感じていくようにしている。画家としての視線が、詩の言葉の世界で「色」の発見につながっていったに相違ない。その「色って／こんなにわたしの中に棲んでいたんですね」という詩行は、「色」が外界だけに棲むのではなく、自分の魂の中に棲むものであることを見出したのだろう。そのことによつて絵画と詩の境界を越えてきたのかも知れない。絵画と詩とは共通性があると思ってきたが、この詩「色」を読むとその共有する魂の色彩が重なってくるように思えた。

3

二章「銀の涙」十八篇は、亡くなった夫に寄せた詩篇だ。これらの詩篇は夫の病が進み棺に収ま

るまで、宮崎さんが泣きながら書かれた詩篇群だ。詩の書き方は自由であり、泣きながら書く詩があつてもなんら問題がない。むしろ泣き暮らしてしまふほどの衝撃を乗り越えるために詩作が存在するのならば、詩作の効用として柿本人麻呂以来の挽歌の系譜に属しているだろう。古代から人間は一緒に死んでしまいたいほどに恋焦がれる存在を想起しながら、挽歌という鎮魂詩を書き記してきた。なぜ宮崎さんが「銀の涙」という比喻を作り出したのかと想像すると、泣き暮らした果てに、鎮魂の思いが銀色のように磨かれてしまい、そのような表現になったのかも知れない。私は「口笛」という詩を読むと、私の亡くなった家族の一人が吹いていた口笛の音色を思い出した。この詩は音にも色彩があるのだということを知らせていて、「音色」が魂の音になる瞬間を記している。

口笛

あなたは時々
口笛を吹いた
少し
得意げに
さわやかな
やさしい
口笛を吹いた
うちでくつろいでいる時
わたしの歌にあわせてたりして
口笛を吹いた

その音色が
どこからともなく
流れて

わたしは今でも
あなたの口笛を聞いている

宮崎さんは、耳を澄まし口笛という音の中にも「色」を感じている。人間は肉声から他者を区別することができるが、口笛にも固有の音質のようなものがあるのだろう。それを思い出すことは十分可能であり、「音色」の力なのだろう。きつと音が喚起する再生力によつて、かつての情景が音入りの動画のようにリアルに甦ってくるのだ。「音色」は同じ音であっても音の中に多様な音の質感があり、その中から固有の「音色」が流れてくるのだろう。宮崎さんの詩は、悲しみを癒すために、その「音色」が立ち上げてくることを掬い上げようとしていて、「音色」と魂の対話をしているに違いない。

願っている。

子 宮

女は

子宮という

宇宙を

持っているらしい

このごろ

そのことに

ようやく気づいたのです

新しい

生命を育むと同時に

無限の

愛を育めます

第三章「美しい人生」十六篇は、宮崎さんが目差してきた「美しい人生」に登場してきた友人たちや事物、そして魂を掬い上げてくれる言葉の存在にも感謝している詩篇だ。誰でもきつと「美しい人生」を目指そうとしてきたのであり、それに正直になり、あらゆる存在に感謝を伝えようとする精神こそが、絵画や詩作などの芸術的な活動に向かうのだと語っている。その創造行為の源泉として自らの身体や精神の在り方の相互連関を同時に考えようとしている。その意味で詩「清流」、「ある性的欲望」、「子宮」などは、宮崎さんの代表的な詩篇として読まれるだろう。この詩篇のなかの「子宮」を引用してこの小論を終えたい。家族や友人や故郷を大切にしている人びと、またそれらの根底にある「清らかな魂」を忘れずに想起しようと考えている人びとにぜひ読んでほしいと

子宮は
みなもとです
数々の運命を
受け入れます

ただし

子宮は

耕やさなければ

なりません

感傷に

ひたつてばかりいられません

厨にて

米を研ぎ続けます

子宮は

幸福か

不幸か

わかりません

でもわたくしは

満ちあふれ出る

愛の泉にしたいのです

宮崎睦子詩集『美しい人生』葉解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2012